

始ったペストコントロール技能師講習

平成21年10月23日(金) 北海道ビルメンテナンス会館



いよいよ技能師制度が全国で開始され、北海道地区では10月23日北海道ビルメンテナンス会館で講習に続いて即日試験が実施された。全国で保有者数1000人に満たなくて、取得が比較的難しいペストコントロール防除士に次いで、一挙にPCO協会が認定する技能師が大幅に増えることになる。HACCPなど“食の安全”を追及する食品加工施設や大型店舗からの「業者を選択する基準となる何か資格制度を」の要望にこたえるのがねらい。受講生募集開始時には足踏み状態で、あわや札幌での開催が危ぶまれたが、倉田会長名で制度目的の説明と受講をよびかけたところ、38名が応じ胸をなでおろす経過があった。全員合格を祈る。講義科目と講師名は

ネズミ、害虫の基礎知識	田中生男 博士	ネズミ、害虫防除論とIPM	同
PCOが知っておくべき法律	平尾素一 博士	防除管理と安全施工	同
PCOのためのコンプライアンス	倉田清 会長		

酪農大学での渡辺護博士特別講義にPCO会員も参加



11月16日酪農大学で特別講義を予定していた、元富山衛研、現国立感染症研究所客員研究員の渡辺護博士の講義に、異例ではあるが、佐々木教授の計らいでPCO協会会員の授業参加許可を頂いた。当日は講堂ではなく、全くの一般教室にて学生と大学院生さん14名と一緒に、しばし、学生時代の雰囲気になりながらの勉強となった。PCO会員会社の20名は早く入室して、授業の邪魔にならないように後方で固まって座っていたが、佐々木教授の強い勧めに従い、遠慮なく前席に移動させていただいた。世界的に蚊が媒介する感染症に再び脅威を感じている昨今、ところが蚊の研究家が不足している。北海道はシベリヤでウエストナイルウイルスの存在が確認され、多種の蚊が媒介するこのウイルスが南下の気配、南からは主にコガタアカイエカが媒介する日本脳炎がじわじわ北上、これらは

非常に近縁であり、遺伝子交換をしたなら、日本はひとたまりも無い。だいぶ白髪が目立つようになった渡辺博士は長年にわたるコガタアカイエカのご研究を披露し、発生予察の難しさ、継続的な研究がいかにかを力説された。PCO 参加と知り、ついでながら、富山で採集したトコジラミのピレスロイド薬剤抵抗性について言及され、その対策について未発表研究も説明された。参加 PCO 会員は恐らくそれを会社秘伝の防除法にするのではないかと思う現実的な話に、質問は学生達をさしおいて PCO から活発にあった。出席者一同、佐々木均博士と渡辺博士には大感謝だった。

藤村忠明副会長

第 5 3 回生活と環境全国大会長感謝状受賞（平成 2 1 年度生活環境改善功労者）

2 1 年 1 0 月 2 6 日 会場 福岡県福岡市「アクロス福岡」にて

ペストロジー学会つくば大会 11 月 12、13 日



大会長宮ノ下氏（食品研究所） 実行委員長梅沢茨木 PCO 協会長。秋葉原からつくばエクスプレスで約 1 時間たらずの“つくばカピオ”で開催されたが、出席者は 280 名、懇親会 200 名、演題数 30 題と云うチョット寂しい学会であった。不況風が我々業界にも吹き荒れているのが、それとも、田舎と侮られたか定かでは無い。我が協会からは高安、諏訪、青山（敬称略）のわずか 3 氏が参加で 1 題発表であった。総合司会進行やスライド係りの重要な役割は鵬岡商事若手社員が勤め、地元協会会員は受付など裏方に徹していた。梅沢県会長に聞くと、ペストロジー会員が少ないとか、地方開催はその後の学会会員を増やす機会になるので、いいことではあるが、会場での発表を聞けず裏方だけというのはいかがなものか？ 今回のシンポジウムは会場が万博跡地だっただけに、「博覧会における IPM と協力防疫活動」がテーマだった。つくば博、大阪花博、愛地球博の講演であったが、つくば博は Windows が無い時代、国産ソフトでのデータ解析、3 日に 1 回の同定、ワープロでの報告書作成と今日の機械技術の差からよくも見事にこなしたものと改めて感心した、花博は外国から直接植物が持ち込まれたために、検疫上の問題が最大の課題であった。愛地球博は開催 2 年前からの生物相調査とそれにもとづく防除対策提案と見積もり、開催中は一切殺虫剤は使用できなくてドブさらいまでやって吸血昆虫の飛来を防いだ話に IPM はかくあるべきと見本のような講演だった、実は愛地球博で報告した資料は一切他言できない契約になっていたのも、川瀬氏はデータを示すことが出来ず説明に苦慮していたが、見事な発表に絶賛したのは私だけではなかった。（分責、青山）